

ぶれない頭と眼を養う「哲学的訓練」

——指針なき現代の一步先を読み解くための実践講座

佐藤 優 （聞き手・小峯隆生）

※外交の最前線で培った対人術の要諦をまとめた書籍『人たらしの流儀』で、佐藤優さんの聞き手を務めた小峯隆生こと、私は、筑波大学で『コミネ語り』と称した講座を不定期でおこなっている。私の講座に、佐藤優さんをゲストスピーカーとして招き、始めたのが、このワークショップ。新しい世界観を身につけるべく、今月も、ともに学んでいこう。

第五回

20世紀は18世紀!?

佐藤 突然ですが、いまは何世紀ですか？

——21世紀になって、10年ちょっとですが……。

佐藤 はい、その通り。では、その前は？

——もちろん、20世紀です。

佐藤 そうですね。けれど、哲学的に見ると、20世紀後半は、18世紀なのです。

今回は、この説明をしましょう。

情勢論と存在論という考え方があります。以前に、私が上梓した『新約聖書 I』の「非キリスト教徒にとっての聖書」の項でも触れた考え方です。

普天間飛行場の移設問題について、嘉手納基地と統合するとか、辺野古に移設する、あるいは県外、国外に出すなど、いろいろと報道されています。

これらは、すべて情勢論です。現状の予算、現状の日米関係、既存のルール、こうした枠組みの中で考えるのが、情勢論です。大ぐくりで言えば、日本の新聞に書かれているのは情勢論です。対して、存在論は、こう考えます。

そもそも、沖縄は日本の中にある必然性はあるのか？

沖縄がなぜ中国の中に入ってしまったてはいけないのか？

さらに、軍隊は必要なのか？

このように、物事を根源から考えていく、既存のルールが間違っているのではないかと疑問を抱いて考えていくのが、存在論です。

哲学的に言えば、20世紀は存在論の世紀になるはずだったのです。「我々は、このまま

でいいのか」「そもそも既存の枠組み、ルールが間違っていないか」と考える世紀でした。

そう考えるように至った経緯を見ていきましょう。

18世紀、人間は「理性」を見出しました。あらゆる人間が共通の理性を持っている。世の中の原理、法則は理性によって認識できると考えました。

この認識については、『新哲学入門』の中で、^{ひろまつわたる}廣松渉さんも触れています。

我々は何かモノを見るとき、そのモノ自体は自分の外にあります。

たとえば机で本を読むとき、本は机の上、自分の外にありますね。自分の見る対象が先方にあり、当方（自分）は、見るという認識を内部でします〈意識対象〉。

自分が認識の対象として見ているもの、それが何であるかを認識する。この場合は本ですね〈意識内容〉。

でも、本を読んでいるつもりでも、ほかの事に気がとられて、ぼんやり見ていることなどもあるでしょう。見ているけれど、見ていないという状態です。見る、という行為によって自分の中に本という像が結ばれるためには、心、意識の作用が必要になってきます〈意識作用〉。

認識は、この「意識対象、意識内容、意識作用」3項図式で成り立っていると、廣松さんは述べています。

ところが中世までは、こんな感覚ではありませんでした。

物事を認識するという感覚は、薄い膜が対象から、ふーっと飛んできて、ペタッと貼り付いて、その瞬間、瞬時にわかる。そんな心理感覚だったのです。

だから、impression の言葉のなかには、press=押すという意味の単語が含まれています

ね。ハンコのようにポンと押してわかる。「あっ！」と一瞬で感銘を受けたりする。そんな感覚でした。

物事が直感でわかる。しかし、その直感が正しいかどうかの基準は、どこにもないので

す。だから、物事をきちんととらえていくために、我々は理性を使うようになりました。

理性は、分割可能です。

$A = B$ $B = C$ ゆえに $A = C$ 。

これが、理性を使った近代的、合理的な考え方なのです。

さて、19世紀はいつ始まったのでしょうか？ 答えは、18世紀末、1789年フランス革命の起こった年からが“19世紀”です。

世の中は理性によって認識できるという合理的な考え方は、革命へと発展し、科学技術も進歩させました。その結果として起こったのが、産業革命です。蒸気機関が発明され、汽車が走り、大量輸送が可能になりました。

そして電気も発明され、医学の進歩とともに薔薇色の未来が到来すると、19世紀の人々は考えていました。

しかし、実際にはそうなりませんでした。

1914年に第一次世界大戦が起こってしまい、“19世紀”は終わりを告げたのです。

文明が発展して、薔薇色の未来になるはずの19世紀は、大量殺戮と大量破壊で幕を閉じました。このような結果になった世界をみて、人々は、「今までのあり方でいいのか」「もう一回見直そう」これが次の世紀＝20世紀の課題となりました。

「そもそも、既存の枠組みは間違っていたのではないか？」と根源から考え直す存在論が登場してきたのです。

どこの国が、一番、存在論を真剣に考えたと思いますか？

戦争に勝った方は、喜び、思考停止します。負けた方は、何で負けたんだろうと考えます……。

——すると、ドイツですか？

佐藤 正解です。1910年代の終わりから、30年代にかけて、存在論をととても深刻にかつ、真剣に考えたのがドイツでした。

最も有名な人が、マルティン・ハイデッガー。初期には、マールブルク大学の学長として、ナチスを支持したことで知られる人物です。

ナチズムとファシズムは、アメリカの圧倒的な物量によって敗れました。

大量に物量を作り出すことのできたアメリカの当時の情勢は、フランス革命以降のヨーロッパと相違ありません。18世紀の啓蒙の精神から来ているのです。

このアメリカが勝利したことで、20世紀だった世界が再び産業革命の起こった18世紀に戻ってしまったのです。

——アメリカの思想って、先進的じゃないってことですか？

佐藤 そう古いのです。しかもこのアメリカも行き詰まります。ソ連との冷戦に突入し、1989年のベルリンの壁崩壊に見られる東西冷戦の終結、イラクとの91年の湾岸戦争、という形でアメリカの限界が露呈し、20世紀が終わってしまったのです。

——ということは、「俺が世界の警察だ！」と己が正義を押し付けるアメリカの啓蒙の精神も行き詰まってしまった。今のユーロのように個々の国家の多様性を認める国家間の在り方は、アメリカを先取りしている姿になるんですね。

世界史なんてない!?

佐藤 アメリカの、時に傲慢^{ごうまん}とも思えるこうした精神がなぜ行き詰まり、他と衝突してしまったかという点「アメリカには世界史という発想がない」という点に見られます。

また同じように冷戦という形でアメリカと衝突したソビエトにも、ソ連史しかありませんでした。

双方、世界の歴史は、最終的に、アメリカ史とソ連史といった自国の歴史に収斂^{しゅうれん}していくという考え方が無意識のうちにあったわけです。

戦前の日本にも、国史の中に世界史はありません。いずれ、日本の中に世界の歴史が、包摂されていくという考え方でした。

——それって、なんか、変だと感じるんですが……。

佐藤 1600年の関ヶ原の戦いは、天下分け目の戦いとして、我々には意味がありますが、アメリカ人にはどうでしょうか？

——「へえー、そんなことがあったのですね」という感じで関心は薄いでしょうね。

佐藤 我々、日本人には、あの関ヶ原の戦いなしに、日本の歴史はない。

先ほどは、アメリカ人でしたが、これがドイツ人だとしても同じでしょう。

しかし30年戦争（1618～1648年）は？となれば、ヨーロッパにおいては死活問題にかかわるほど重要になってくるはずです。

ドイツには歴史という言葉が2つあります。

1つ目が、ヒストリエ、和訳すると、「記述史」。

これは、年表の延長線上のもので、価値観を入れないで、あったことを、ただただ表面的に時系列で記していくものです。

2つ目が、ゲシヒテ。和訳すると、「出来事史」。

歴史上の出来事に、意味を見出し、結び付けて、評価していくものです。

近代の歴史は、すべてゲシヒテです。ここで厄介なのが、ゲシヒテは複数存在しうることです。

日本人にとってのゲシヒテと、中国人にとってのゲシヒテはまったく異なるのは、先の

アメリカ人にとっての関ヶ原の例を見ても当然でしょう。

歴史上の出来事に対する個々の解釈が先行し、それに従って史実を拾っていく。昨今、日韓、日中で共通の歴史観を作ろうという動きもあるようですが、こうしている限りその道のりが限りなく険しいものであることも見えてくるのです。

〈つづく〉